時評

歌人論の力

田中拓也

優れた歌人論は短歌史を俯瞰するための大切な道標となる。楠見朋彦『塚本邦雄の青春』が浮かび上がらせた若き日の塚本邦雄。古谷智子『片山廣子　思ひいづれば胸もゆるかな』が描き出した片山廣子の生涯。俵万智『牧水の恋』が蘇らせた若山牧水の恋。いずれも心に深く残る印象深い歌人論の単行本である。昨年十二月に刊行された松岡秀明『天啓　ハンセン病歌人明石海人の誕生』（短歌研究社）は短歌史の中で独自の光彩を放つ明石海人の作品に新たな光を照射する貴重な一冊である。

本書の主たる目的は海人の全体像を捉えることではなく、癩患者としての人生を詠んだ歌集『白描』の「第一部　白描」の歌を、その背景を検証しながらていねいに読んでいくこと、そしてなぜこの歌集がベストセラーになったのかを考えることだ。

（「プロローグ『癩歌人』としての明石海人」より）

同書の特徴の一つは松岡が自身の専門分野である医学・文化人類学の豊富な知見を踏まえて、明石海人の生涯と作品を丁寧に見つめ直した点にある。例えば、同書の中の作品の読みの一例を挙げたい。

・蚊帳ごしの灯（ともし）にかげをふかめつつ友が寝顔はおとろへにけり

筆者は、「かげをふかめつつ」の主語は「友が寝顔」ととった。極端に痩せた状態は羸痩（るいそう）と呼ばれるが、「友」はこの状態に陥っていて顔の脂肪が落ちて彫りが深くなっているのをこう表現したと思われる。

（「長島愛生園へ」より）

掲出歌は作者が入院中という背景を踏まえて読めば、決して難解というわけではない。だが、「羸痩」という状態を知っているか否かでは解釈に明らかな差異が生じてくる。もちろん、作品のみから解釈する大切さを否定するつもりはない。だが、松岡の作品の読みの重層性は明石作品を読み解くうえで有効に機能していると思う。さらに、松岡が援用する文化人類学の観点からのアプローチも作品理解を深める一助となっている。

「病いの語り」には、（一）「回復の語り」、（二）「混沌の語り」、（三）「探究の語り」の三つがあるとフランクは説く。「探究の語り」とは、病む者が苦しみに立ち向かい、病いを受け入れ病いを活用しようとする物語で、病む者にその人独自の物語を語る声を与える。

（「失明」より）

作品世界を「語り」の観点から照射した「失明」の項の解釈は明石作品だけでなく、他の歌人の作品を読み解くうえでも参考になるように思う。

優れた歌人論は一人の生涯と作品に新たな光を当てるだけでなく、その時代をくっきりと浮かび上がらせる力を持っている。